



雨十題 一大観に捧ぐ

入場
無料

前期 2025.8.26[火]—9.20[土]

後期 2025.9.24[水]—10.25[土]

会場 藝文ギャラリー AM10:00 ~ PM5:00 (但し毎週日曜日、月曜日は休館)

主催:公益財団法人 常陽藝文センター 後援:株式会社 常陽銀行

公益財団法人 常陽藝文センター

〒310-0011 水戸市三の丸1丁目5番18号常陽郷土会館内

☎029-231-6611

<https://www.joyogeibun.or.jp>

ごあいさつ

公益財団法人常陽藝文センターでは郷土作家展シリーズ第294回として、「雨十題一大観に捧ぐ」を開催いたします。

1919年12月大阪で横山大観による「洛中洛外雨十題展」が開催され、翌年1月には東京に巡回しました。水墨と彩色を用いた掛幅形式の連作で、京を舞台に名所十ヶ所、十種の雨の風景を描いています。

今展は洛中洛外雨十題 10 点のうち株式会社常陽銀行が所蔵する 4 点を二期に分け、そのほかに日本画、洋画、デザイン、彫刻などジャンルを交えた現代作家の作品 8 点を加えて「雨十題」としました。前期は自然の風景や印象を捉えた作品を、後期は人物や暮らしの気配を感じさせる作品をテーマに合計 19 点（うち 1 点は通期）を展示いたします。

公益財団法人 常陽藝文センター

作家・作品情報・作家のことば（作家名五十音順）

【前期】

市村 妙子 ICHIMURA TAEKO



1985 武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業
2014 第28回全国絵画公募展IZUBI大賞
2016 第1回札幌国際芸術賞展協賛賞市民賞
2018 第9回日本芸術センター絵画展金賞
現在 二紀会準会員。つくば市在住。

「雨雲アラーム」2021年
162.0×130.3cm 銀筆、油彩、白亜地 第74回二紀展

「雨雲が近づいたことを知らせてくれるという雨雲アラーム。」

AIの力は凄い。人生の選択も、ビッグデータを有するAIに任せられた方が、よほど幸福になれそうだと愚かな私は思う。芸術の世界でも機械がその表現を拡張し始めている。けれど創作の根本にある、美しさ感動し、描くことを楽しむ心、ここはまだ人間だけの領域。そしてそれこそがかけがえのないものになる。

人は雨の心配のない時でも空を見上げ、それを喜ぶことができるのだ。」

栗山 淳 KURIYAMA JUN



「驟雨 (九十九里浜)」
2005年 130.3×162.0cm
油彩、キャンバス

1930 稲敷郡河内町に生まれる
1965 二科展初入選。服部正一郎に師事
2003 二科会内閣総理大臣賞
2006 文化庁主催 現代美術選抜展
2015 逝去(享年84)

「あせることなく ゆったりと 自然を愛し 吾が道を行く」

「寡黙なまなざし 栗山 淳 展」(常陽藝文センター) リーフレットより

小林 恒岳 KOBAYASHI KOGAKU



「春雨」1985年
72.7×90.0cm
岩絵具、膠、西の内紙

1932 東京都杉並区に生まれる
1959 東京藝術大学美術学部専攻科(現・大学院)修了
1979 第29回新興美術院展文部大臣奨励賞(文化庁買上)
文化庁主催現代美術選抜展
2018 逝去(享年85)
追悼一小林恒岳展(茨城県天心記念五浦美術館)

「写生というのはいきいきと生きている姿を写すということ。東京から石岡に移って来たら、抽象から具象に、水辺に住めば水辺の、山に住めば山の絵になるのが自然です。その接点によって画風も変わります。絵描きは環境が食べ物だから。風景はそこで生活しているものでないとその本当の姿を描くことはできません。」

「スポットライト」『茨城朝日』第759号、1997年1月15日より

小林 巢居人 KOBAYASHI SOKYOJIN



「水郷 (雨の日)」
制作年不明 44.5×60.0cm
岩絵具、膠、麻紙 株式会社常陽銀行蔵

1897 稲敷郡長戸村(現・龍ヶ崎市)に生まれる
1918 小川芋銭の紹介を得て上京し平福百穂に師事
1928 日本美術院展初入選
1937 同志とともに日本美術院脱退し新興美術院を結成
1978 逝去(享年81)

「水辺での生活は百姓とスケッチで過ごした。家の前から水郷高浜の風景が広がっていた。だからスケッチのテーマには不自由しなかった。水辺の草や花、水の中のドジョウやフナ、メダカなどなんでも絵の材料になった。それがみんないろいろな植物や動物とともに生きている。春が来て水がとけるとみんな喜ぶ。水に飢えている時に雨が降るとみんなよみがえったような表情になる。「水辺絵巻」や「春」あるいはその他の作品に私は随分水郷をテーマに描いてきました。」

「この人と一時間」『いはらき新聞』1971年7月12日より

野沢 二郎 NOZAWA NIRO



「通り雨」2024年
30.0×30.0cm 油彩、キャンバス

1957 常陸大宮市に生まれる
1982 筑波大学大学院芸術研究科修了
1997 第8回バングラデシュ・ビエンナーレ(ダッカ)優秀賞
2020 6つの個展(茨城県近代美術館)
現在 無所属、明星大学教育学部教授。常陸大宮市在住。

「私の作品は、激しいタッチと、静かな情景が同居するような絵かもしれません。」

雨や風や霧といった気象に関わるイメージもあると思います。

徳富蘆花の「自然と人生」の中に以下のようなくだりがあります。「傘を翳して暫し佇む程に、時はぱったり已み、あとの静寂たとうるに物なし」。雨の後に静けさがやってくるように、制作においていかに激しい作業があったとしても、完成時は落ち着いた佇まいを持った絵でありたいと思います。」

峯岸 義太 MINEGISHI YOSHIMOTO



1926 那珂湊市(現・ひたちなか市)に生まれる。幼少より菊池五郎に師事
1943 旧制水戸中学校在学中に第17回自由美術展入選
1953 鶴岡義雄、小森邦夫らと美術グループ「セルバン」を結成
1962 第8回一陽展一陽賞、安井賞展
1995 逝去(享年69)

「雨後」1951年
116.8×91.0cm 油彩、キャンバス 日立市郷土博物館蔵

「作家は作品のみでよいと思ふ」

「詩情の画家 峯岸 義太 展」(常陽藝文センター) リーフレットより

横須賀 幸男 YOKOSUKA YUKIO



1954 水戸市に生まれる
1978 茨城大学教育学部教員養成課程美術専攻科卒業
2005 われらの時代(水戸芸術館現代美術ギャラリー)
2015 6つの個展-2015-(茨城県近代美術館)
現在 無所属。水戸市在住。

「雨の森II」2014年
193.9×162.1×3.0cm アクリル、木炭、麻布、木枠

「この作品を発表した2014年は多くの雨が降り、自然の営みがわずかに変化の兆しを見せ始めていました。6、7月に水戸で個展があり、大江健三郎の「雨の木」を聴く女たちを手がかりに描き始めました。それは生と死のイメージを雨の木(Rain Tree)というモチーフで連作した短編集でした。」

最終的にはそのメタファーとしての自然観は、雨の日の午後、かすかな晴れ間に感じる「大気の光」のようなものに変化し、画面上に投影されたように思えます。なにげない自然の内部から時として発するような光が興味深く、今もその空間に少しでも近づくことを考え制作しています。」

岡崎昭夫 OKAZAKI AKIO



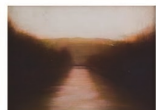
「遠い日 -rain-77(A)」1977年
162.0×194.0 cm アクリル、キャンバス
筑波大学アート・コレクション蔵

1951 高知県に生まれる
1975 高知大学教育学部卒業
2006 筑波大学芸術系教授となる
2016 第62回一陽展にて委員推挙
2021 逝去(享年69)

「模写ないしは再現という造形原理は、印象と表現という芸術観へと移行する。ジャコメティに従えば、模写から感動そのものへ、あるいはまた、セザンヌによれば、印象から感性を通じての表現へと移行するのである。(略) わたしたちが造形表現行為に従事する意義は、現代社会における知的なものと情緒的なものをわたしたち独自の経験に統合することである。」

「模写から表現へ」『わいわい画報』第005号、1978年10月20日より

片口直樹 KATAGUCHI NAOKI



「霧」2012年
24.0×33.0 cm
油彩、キャンバス ART OSAKA2012

1978 大阪府に生まれる
2005 第22回天展 天理ビエンナーレ2005大賞
2017 片口直樹 聴くことの比喩展(いわき市立美術館)
2023 赤い椿白い椿と落ちにけり(茨城県天心記念五浦美術館)
現在 無所属、茨城大学大学院教育学研究科准教授。水戸市在住。

「《霧》の舞台は、葉が紅く染まる京都である。雨の日の肌寒い午後、平安神宮を横目に東を向けば、その光景はあった。雨が視界を遮り、霧が光を散乱させ、霞んだいつもの風景は不確かなものとなっていた。本作は東日本大震災の翌年に描いた。世界が不確かに見え、ピンボケの風景の中に感じたリアリティを表現している。」

倉島重友 KURASHIMA SHIGETOMO



1944 長野県千曲市に生まれる
1971 東京藝術大学大学院美術研究科日本画専攻修了
2012 再興第97回院展内閣総理大臣賞
2019 画業50年記念 倉島重友展(茨城県天心記念五浦美術館)
現在 日本美術院同人、広島市立大学名誉教授。龍ヶ崎市在住。

「雨後」1976年
205.0×170.0 cm 紙本、岩絵具、箔 再興第61回院展

「雨の風情も良いものですが……
運動会や遠足の朝、雨に濡れながらぶら下がっている、てるてる坊主に恨めしく思ったことがあるでしょう。だから晴れた時の喜びはひとしお。50年も昔のことですが……
続いた雨がやっと晴れたので近くの公園に行くと、大きな水溜りが出来ていました。小さな息子は長靴で水を飛ばしながら大喜び。公園の遊具には目もくれず水溜りで遊びました。雨降りのお陰です。」

後藤雅宣 GOTO MASANOBU

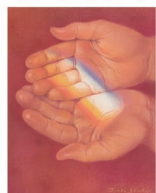


「彩雨の白輝」2023年
182.0×182.0 cm クロス顔料 第28回うしく現代美術展

1957 石岡市に生まれる
1982 筑波大学大学院芸術研究科デザイン専攻修了
1998 モダンアート展奨励賞(以後3回連続受賞)
2017 ANBD東京展グランプリ受賞
現在 モダンアート協会会員、千葉大学名誉教授。牛久市在住。

「雨の色は何色なのか。 静かに思いを巡らしてみた。
絶え間なく降り落ちる透明な水滴の一つ一つが、情景や空気、見る者の心情などなど、さまざまを織り込みながら映し出している。それらが透かし重ねられながら、やがて色として心の奥深くに溶け込んでゆく。光を孕んだ無数の雫は飛沫となって弾け、白い輝きを放ちながら消えていく。
雨の色は? その解を、ひとつの画面に描き出そうとしている。」

七字純子 SHICHIJI JUNKO

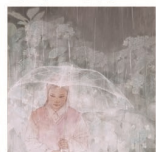


1966 水戸市に生まれる
1991 ヌーベルパステルイラストコンペ優秀賞
2013 第48回茨城県芸術祭美術展覧会大観賞
2023 水戸市民会館開館記念 水戸の風2023
現在 茨城デザイン協会会員、茨城県美術展覧会委員。水戸市在住。

「にじのかけら」2013年 116.7×91.0 cm
パステル、キャンソン・ミ・タント紙 第48回茨城県芸術祭美術展覧会

「ある日の屋下がり、我が家のガラス窓から差し込む光が屈折して、部屋のあちこちに七色の光が現れました。当時9歳の娘は、思わずその美しい光を両手ですくい取り、うっとりと眺めていました。小さな手のひらの中で輝くそれは、まるで虹のかけらのようでした。」

水見剛 MIZUMI TAKESHI

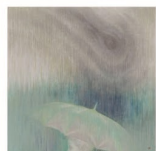


「雨音」2024年
100.0×100.0 cm 紙本彩色 第79回春の院展

1970 長崎県諫早市に生まれる
1995 筑波大学大学院修士課程芸術研究科修了
2023 第78回春の院展奨励賞
2024 再興第109回院展奨励賞
現在 日本美術院院友、茨城県美術展覧会会員。つくば市在住。

「15歳になる長女の思春期にある想い、悩み、心の揺らぎを、しとしと降る雨に重ねて表現しました。」

山本浩之 YAMAMOTO HIROYUKI



「よどむ雨」2022年
100.0×100.0 cm 紙本彩色 第77回春の院展

1970 山口県に生まれる
2003 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程満期退学
2016 再興第101回院展日本美術院賞(大観賞)(翌年同賞)
2018 日本美術院同人推挙
現在 日本美術院同人、筑波大学芸術系准教授。牛久市在住。

「よどむ様子を描いてみたいと思いました。
具体的な形があるものを多く描かないことを、わたくしなりに試みてみました。
筆や刷毛はもちろん、それ以外の道具も用いてみたり、いつもと少し違う絵具の塗り方、置き方を試してみたりしました。
画面には絵具の効果や現象は現れましたが、目指したものは思うように画面に表れなかったように思います。
いつかは気配とか空気の動きなどと云った、形の無いものも描けるようになりたいと思います。」

笠原鉄明 KASAHARA TETSUAKI



「気配」2014年
103.0×40.0×25.0 cm
樟、アクリル彩色
第20回うしく現代美術展

1953 富山県利賀村(現・南砺市)に生まれる
1992 第27回昭和会日動美術財団賞
1994 第6回現代日本具象彫刻展優秀賞
2000 文化庁優秀作品買上
現在 国画会会員、日本美術家連盟会員、うしく現代美術展実行委員。牛久市在住。

「雨が静かに降りはじめた。
冷たい風が揺れた水面を覆う。
雨音と共に繰り返しかさなり、生まれては消える水紋の広がり。
深い雨音の響きに不思議な気配を感じてしまう。
別の世界に入りこむような思いに駆られる。
揺れる水面は拡がり新たな輪を生み出し、永続的な思いへと結びつく。
やがて雨音は止み、静寂が訪れ水面に輝く月を映し出す。」

横山大観 YOKOYAMA TAIKAN

- 1868年 水戸市に生まれる
- 1889年 東京美術学校(現・東京藝術大学)第1回生として入学(1893年卒業)
- 1898年 岡倉天心のもと日本美術院設立に参画
- 1903年 菱田春草とともにインドに渡航、日本画展を開催
- 1904年 岡倉天心らとともに渡米、アメリカ、イギリスで作品展開催(1905年帰国)
- 1906年 日本美術院の茨城県五浦(現・北茨城市)移転に伴い移住(1909年東京に転居)
- 1913年 岡倉天心死去、下村観山らと日本美術院再興を計画
- 1914年 第1回再興日本美術院展
- 1919年 洛中洛外雨十題展(江戸堀・高島屋／大阪、翌年京橋・高島屋／東京に巡回)
- 1937年 文化勲章の最初の受章者となる。帝国芸術院会員となる
- 1958年 逝去(享年89)

「朦朧派と云う様な文句は最初は批評家のひやかし文句だったのだ。何でも空気を描いたらどうだと言はれてやりかけた事なのだが、線丈けではどうしてもうまく出ないので、初め水で濡らして置いて其上に墨で描き、乾いた刷毛で形を崩さぬ様に外側から墨を刷きとると、それがポーッとした雨の空気を出した様になる。唯夫れ丈けの事なのだ。」

『塔影』9巻8号、1933年10月号より

【前期】



洛中洛外雨十題のうち「堅田暮雨」
50.0×70.2 cm 1919年 絹本彩色
株式会社常陽銀行蔵

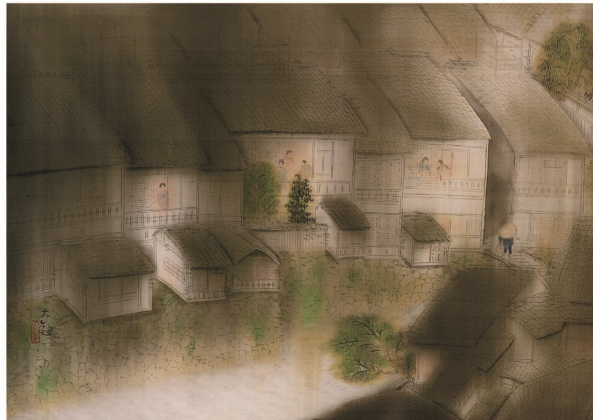


洛中洛外雨十題のうち「宇治川雷雨」
50.0×70.3 cm 1919年 絹本彩色
株式会社常陽銀行蔵

【後期】



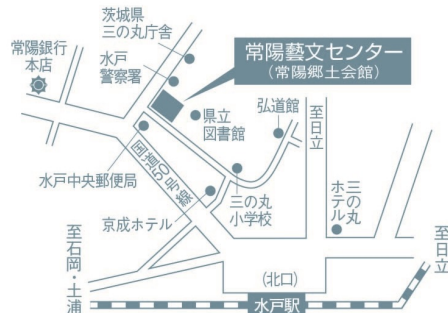
洛中洛外雨十題のうち「三条大橋雨」
49.5×70.2 cm 1919年 絹本彩色
株式会社常陽銀行蔵



洛中洛外雨十題のうち「辰巳橋夜雨」
49.5×70.0 cm 1919年 絹本彩色
株式会社常陽銀行蔵

公益財団法人 常陽藝文センター

〒310-0011 水戸市三の丸1丁目5番18号 常陽郷土会館内
☎029-231-6611 <https://www.joyogeibun.or.jp>



交通のご案内

- JR水戸駅から徒歩5分。銀杏坂バス停下車、徒歩2分。
- 駐車場はございません。最寄りの有料駐車場をご利用ください。